『全相二十四孝詩選』と郭居敬（承前）

――二十四孝図研究ノートその四――

橋本草子

本誌第四十三号（平成七年一月）で「『全相二十四孝詩選』と郭巨敬」と題して、北京図書館（現在の中国国家図書館）所蔵の『全相二十四孝詩選』の書影を紹介したが、その際には全冊の撮影が許可されないこともあって、第七頁までしか紹介することができなかった。

その後、寺田瑞木氏によって残りの部分の図像が紹介されたが、[1] 上部の図像のみで下の文章の部分はないものであった。今回、機会があって入手できた残り三頁分の書影を紹介するとともに、前稿発表の後に諸家によって明らかにされた事実をも紹介して前稿の訂正と補足を行いたい。

前稿で紹介した部分に続くのはこの稿の最後に掲げる三頁である。

前稿でも紹介したとおり、この刊本には二頁、説話にして四孝子分の欠落がある。室町期から江戸初期にかけて、「全相二十四孝詩選」の刊本が日本にも渡来していたことは、現存するいくつかの写本から明かである。前稿では川瀬一馬氏旧蔵の五言詩注本がこの刊本またはその系統の流れを引くものだろうとして、欠落している四孝子

は郭巨、朱寿昌、黄山谷、王裒であろうと推測した。しかしその後、黒田彰氏によってこの刊本に、より近い写本として身延文庫所蔵の『全相二十四孝詩選』の存在が指摘され、この刊本で欠落している四孝子、郭巨、黄山谷、朱寿昌、王裒の本文が紹介された。[2] 身延文庫所蔵の写本とこの刊本には姜詩の入る位置や細かな文字について相違があるが、すべて書写の際の誤りと見ることができ、身延文庫蔵写本は確かにこの刊本の系統を引くものといえよう。

また前稿で、『万暦大田県志』巻二十人文志に郭居敬の著書として「百香詩」の名があげられていることを紹介したが、『百香詩』なる書物は中国にも日本にも伝存せず逸書というべきものであった。ところが一九九九年に金文京氏によって龍谷大学図書館の写字台文庫の中から、この「百香詩」にあたると思われる郭居敬『百香詩選』の抄本が発見された。[3] 金氏の報告によればこの書の正式の書名は『新編郭居敬百香詩選』で他の同類の詩集三種と合訂されている。すべて同一人の手になると思われる抄本で、抄写の年代は室町後期から近世初期と推定される。『百香詩選』は、冒頭に至治癸亥（三年、一三二三年）の尤恪慎の序があり、それに続く本文は、首に「新編郭居敬百香詩選／延平尤渓郭儀祖居敬選」と題する。内容は琴、棋、書、筆等の百の題による七言絶句百一首[4]を載せたものである。本文の後には蔡文卿、廬可及、黄文仲という三人の人物による「題百香詩稿」という三首の七言絶句があり、最後の尾題は「新編郭居敬百香詩選終」となっている。詳細については金文京氏論文を参照していただきたいが、金氏の指摘する新しい重要な事実を二三紹介しておく。[5] 第一に金氏はこの写本がもとづいた底本は首題や尾題の状況から考えて、刊本であったにちがいない。おそらくは明代の刊本ではなかったかとされる。これは重要な指摘で、『全相二十四孝詩選』以外に郭居敬には刊行された著書があったことになる。金氏の指摘するとおりこの抄本の底本は明刊本であったかと思われるが、ただ、至治三年（一三二三年）の尤恪慎の序があることから考えると、最初の刊本は元代に刊行されていたと考えてもよいのではなかろうか。元代の刊本は現存するものが少ない

が、出版業が盛行していたことは種々の記録から明かであり、この『百香詩選』も『全相二十四孝詩選』も元代にすでに刊行されていた可能性が高いと私は考えている。

第二に金氏は、『万暦大田県志』などでは、郭居敬は居敬が名で、字が儀祖と考えられていたが、この書の巻首に「延平尤渓郭儀祖居敬選」とあるのをみれば、名が儀祖、字が居敬であったらしい。字を以て行われた結果逆に考えられるようになったのであろうという。これも従来の説を訂正する重要な発見である。第三に、王徳毅編『元人伝記資料索引』を調べると、郭居敬のために序および題詩を寄せた四人の人物のうち、蔡文卿については『成化河南総志』『嘉靖河南通志』および『天啓中牟縣志』に伝が見え、また盧可及については『弘治興化府志』に見えるとのことである。今、私もそれらの原文に当たることができていないが、『元人伝記資料索引』によれば蔡文卿については「蔡郁、字は文卿、中牟の人。経を帯びて鋤き、道を以て自ら楽しみ、聞達を求めず、累ねて徵せらるるも起たず。卒年八十一。」とある。盧可及については「盧端智、字は可及、常州の人。泰定四年（一三二七年）の進士、至順二年（一三三一年）興化路知事に任ず。」とある。金氏によれば郭居敬に題詩を寄せた時には蔡文卿も盧可及も、無官の身であったことになるが、蔡文卿の題詩に「丹桂一枝」云々とあるのは科挙への合格を意味するから、蔡文卿そしておそらくは郭居敬もまた、それぞれの略伝が述べるように仕進に全く意がなかったわけではないであろうとのことである。また、「以上から考えると郭居敬が北方の文人乃至は官僚となにがしかの関係をもっていたことは事実のようである。そしてそれは尤恪慎の序に、郭居敬が手紙と自作の『百香詩選』を送ってきたと述べるように（おそらくは序文の依頼もなされたのであろう）、郭居敬の方から積極的に求めたものと推測される。その背景に仕官への願望があったであろうことは、蔡文卿の詩が暗示している。」とされる。

前稿では郭居敬の生年を一二九〇年から一三一〇年位の間を可能性として考えたが、この『百香詩選』の草稿を

郭居敬が尤恪慎に送ったのは一三二三年以前と考えられるので郭居敬の生年はもう少し早い時期に繰り上げる必要がある。また郭居敬がこのように自分から積極的に全国の士人と接触していたとすれば、虞集、欧陽玄との接触の時期を彼らが官を辞して南帰した元末の至正年間に限定する必要は無いことになる。前稿で『全相二十四孝詩選』の出版時期を一三三六年から一三四六年ころの時期とした推定も、もう少し繰り上げることができるかもしれない。ただ尤恪慎の序では郭居敬に『全相二十四孝詩選』の著があることには触れていないから、『全相二十四孝詩選』は『百香詩選』より後の著作と考えてよいであろう。

また、『百香詩選』『二十四孝詩選』がともに「詩選」と題するのは、題材となる事物を選んで詩を作ったという題詠の意味であるから、『二十四孝詩選』は一般に思われているような道徳教化、児童教育のための詩という性格のほかに『百香詩選』と同じく題詠詩としての一面があったであろうという金氏の指摘も重要である。日本で禅林に多く『二十四孝詩』が受け入れられたのも、明らかに題詠詩、題画詩としてそれが受け止められたためである。

註

(1) 寺田瑞木「江戸初期の二十四孝図—嵯峨本『二十四孝』と渋川版『お伽文庫』「二十四孝」における図像の成立関係」『浮世絵芸術』一四七号（二〇〇四年一月、国際浮世絵学会）

(2) 黒田彰「二　二十四孝の研究1二十四孝の成立—全相二十四孝詩選と日記故事—」（『孝子伝の研究』二〇〇一年九月思文閣出版）

(3) （い）金文京「日本龍谷大学所蔵元朝郭居敬撰《百香詩選》等四種百詠詩簡考」（張宝三、楊儒賓編『日本漢学研究初探』二〇〇二年三月。台北、財団法人喜瑪拉雅研究発展基金会）

（ろ）またその日訳としては金文京「龍谷大学所蔵、元・郭居敬撰『百香詩選』等四種百詠詩について」（『日本漢学研究初探』二〇〇二年一〇月　勉誠出版）

(4) 金氏は春晩の題の詩が二首あって、詩題が九十九しかないのが不審だとされているが、筆者が調べたところでは金氏のあげられた二十六番目の「蝶」と二十七番目の「瓜」との間

に「蜂」の題の詩があり、それでも九十九題にしかならないが、七十四番目の「香炉石」と七十五番目の「夜雨」の間に題の記されていない詩が一首ある。これは転写の際の誤りか原書でもこうなっていたのか不明だが、ここに題があったとすれば百そろっていることになり、「春晩」詩が二首あることから総計百一首となる。

(5) 前註(3)の中国語版と日本語版ではわずかながら相違があり、後者に加筆がみられるので後者の日本語版による。

〔補記〕

この文を脱稿した後で、鄭思肖（一二四一～一三一八）の『一百二十図詩集』の存在を知った。今「知不足斎叢書」第二十一集に収められている『所南翁一百二十圖詩集』がそれである。鄭思肖は福州連江の人。根無しの蘭の図を描いてモンゴルに征服された亡国の悲情を象徴させたことで有名な画家である。趙孟頫とも交際があったが趙が元に重用されたことを憤って絶交し、生涯を宋の遺民として過ごした。『一百二十図詩集』は黄帝、堯、巣父、許由、などの中国古来の人物についての七言詩百二十首を連ねた詩集であるが、元来は鄭思肖の描いた図を伴っていたことはその自序から知られる。「大徳辛丑呉中義梓」の後記があるから大徳五年（一三〇一）に刊行されたものである。ただ、刊行された書物に絵図がついていたかどうかは不明である。漢民族の伝統の継承を意図するこの詩集には、二十四孝子の中の王祥及び陸績を取り上げた次のような詩も収められている。

王祥臥冰圖

母病杯羹意未諧、解衣竟欲臥氷開、有心直透清波下、安得無魚躍出来。

陸績懐橘遺母圖

獨薦霜丸意不安、誰供甘旨侍團欒、驀然憶著嬉生面、萬樹黄金盡喜歓。

大徳五年にはこのように民間で、宋の遺民を標榜する画家の詩集が刊行されていたわけである。いまのところ、郭居敬がこの詩集を見たという確証は無いのだが、『全相二十四孝詩選』もこの詩集の流れを汲むものと考えてよいのではあるまいか。

剡子

老親思鹿乳　身掛褐毛衣

若不高声語　山中帶箭歸

剡子父母年老俱患双目思食鹿乳剡子衣鹿皮入鹿羣之中以取鹿乳猶者見欲射之告斬乃免

庾黔婁

到縣未旬日　椿庭遽疾深

願將身代死　北望故宮心

庾黔婁南齊時人也爲孝廉入到縣未旬日忽心驚流淚棄官還父疾已二日醫云欲知差劣但嘗糞甜苦則爲佳黔婁嘗糞甜得心愈憂苦至十日猶顯不此辰求以身代

張孝張禮

偶值綠林兇　代尋烈士屍
人皆有兄弟　張氏古今稀

張孝張禮家貧兄弟二人禮養母拾麥於綠林遇賊將殺食之禮二人自分供母早食禮養母死賊將殺食之禮二人自分供母早食禮養母死賊將殺食之禮二人自說賊曰禮瘦不如孝肥願殺弟死禮曰禮本許殺勿殺吾兄賊見二人孝義復捨之

田真

海底紫珊瑚　君家芳總不如
春風花滿樹　兄弟復同居

田真兄弟欲分財產堂前紫荊一株花開茂盛夜議析為三號即斬伐之真等共曰樹本同根株聞分斫尚如此人何不如也兄弟感悟是不復分居荊花果發

杉香

深山逢白額　努力博腥膻
父子俱無恙　脫身饒虎口

相傳昔日某父子為虎所去某子博虎食父遂得脫

饑七咸反

陸績圖音怡饑也

孝悌皆天性　人間六歲兒
袖中懷綠橘　遺母報分梨

陸績字公紀年六歲於九江見袁術術出橘績懷三枚去拜辭地術曰陸郎作客懷橘乎績跪答曰欲歸遺母術太吾之

全相二十四孝詩選